

# レビ記 21 章 生きている者と死んだ者

ジェイコブ・プラッシュ

このメッセージでは、未信者と結婚した人や、救われていない近親者を持つ人が直面する問題を見ていきたいと思います。聖書箇所はレビ記 21 章です。

レビ記 21 章を開いてください。1 節から

『ついで主はモーセに仰せられた。「アロンの子である祭司たちに言え。彼らに言え。縁者のうちで死んだ者のために、自分の身を汚してはならない。ただし、近親の者、母や父、息子や娘、また兄弟の場合は例外である。近親の、結婚したことのない処女の姉妹の場合は、身を汚してもよい。』(レビ記 21 章 1 節-3 節)

レビ記 21 章は「主の祭司と死体。生きている者と死んだ者」についての箇所です。これはレビ記の中で最も素晴らしい象徴です。ドイツの神学者カール・バッハはラテン語で「*Novum Testamentin Envetera Latet* (新約は旧約の中に隠されており、旧約は新約の中で明らかにされている)」と言い、この考え方は神学者たちの間で大きく支持されるものとなりました。(もちろんこれはカール・バッハが主張する 30 年前からプリマス・ブレザレンが言い続けてきたものですが、ラテン語でそれを発表しなかったために、学問的には受け入れられませんでした)

パウロは私たちが“トーラー(モーセ五書)を成就する”(ローマ 3 章 31 節参照)と言っています。トーラーはキリストにあって成就しました。律法はイエスを指し示します。ここで問題になるのが、これが私たちにとってどのような意味を持っているかということです。

祭司は死体を処理したり、死体に触れることができませんでした——ヘブライ語で死体は“グファー (*gupha*)”といい、生きている人の体は“グフ (*guph*)”と呼ばれます。キリストの体のことをヘブライ語で言うなら“ハグフ・ハマシアハ”となります。死者の体はグファーと呼ばれます。コーヘン(祭司)は死体に触れることができませんでした。主の祭司が死体に触れるなら、その祭司は儀式上汚れたものとなりました。その人は儀式上きよくなり、主の家での奉仕にふさわしくない者となったのです。いけにえを神殿に持っていくことも出来ず、他の人に代わってとりなしを行うことも出来ませんでした。祭司が死体に触れるなら、神の家や神の民の間で奉仕を行うことができなかったのです。

ひょっとしたら私が最も多く手紙を頂く人は、未信者の配偶者や子どもを持つ人からかもしれない。大多数が未信者の夫を持つ婦人からであり、ときには未信者の妻を持つ夫や、信仰からはずれた子どもや救われていない子どもを持つ人たちからです。このことは他の何事より人々に悲しみを引き起こすものなのでしょう。信者は自分の人生に向き合うことができます。またイエスを信じる信仰の故に自分の死に対しても向き合うことができます。しかし、自分の子どもや妻、夫、両親が救いの確信を持たず、その結果ある程度までしか家族と心を通い合わせることができないとき、それは自分にとって大きな苦悩や失望のもとになるでしょう。

私は救われていない夫や妻と結婚して幸せだというクリスチャンをひとりとして知りません。たいていは、夫が信者なら妻も救われます。水はそれを入れる容器の形を取るものです。しかし、それが逆のケースであれば救われるのは容易ではありません。

未信者の男性と結婚したために長年、何十年と悩まされている人たちがいます。子どもをしつける上でクリスチャンとしての影響を与えたいと思うのですが、夫がそれに反対するのです。

また、子どもの問題もあります。子どもが小さなきにはさしあたって問題ではありませんが、大きくなるとまた違った問題が浮上してきます。私たちモリエルミニストリーズは、救われていない家族の死という難しい問題を扱った『アブシャロムの死』という説教を提供しています。

それはそうと、この考え方を見ていきましょう。私は救われていない夫や妻と結婚して幸せだというクリスチャンをひとりとして知りません。たとえ人間的に言って、信者でない夫が“良い人”で、良い稼ぎ手で、愛してくれる人であって、また素敵な人であっても幸せにはなりません。たとえ人間的に言って信者でない妻が良い妻であってもです。そうであっても、私は救われていない夫や妻と結婚して幸せだというクリスチャンをひとりとして知りません。これは聖書の神学的にありえないことだからです。

信者である私たちを悩ませることといえば、救われていない両親や子どもを持つことです。私を本当に悩ませたことといえば、父親の死であって、私が知る限りでは父は救われることなく亡くなりました。私の母は年を取り、体調も思わしくありません。母はカトリック教徒です。それも頑固なカトリック信者です。母は偽のキリスト教に心理的に捕らわれの身となっています。母は救いに関して生ける神よりもマリア像に信頼しています。私は母が主を知ることなしにこの世を去ってしまうのではないかと心配です。しかし、私はこの人と自分の信じていることについて 5 分と話しをしていることができません。そうすると会話にならなくなるからです。

自分の両親が年を重ねても救われる気配がなく、子どもが大きくなっても救われないとき

、子どもがあれこれするようになって、もう彼らのすることが悪過ぎて知りたくなくなるようなとき、このような状況は信者にとって人生の大きな問題となります。

あの大学を卒業しても、あの会社に入社しても、マイホームを購入したとしてもまだ救われていなければ、救われていません。これは現実の問題なのです。前にも触れたように、この人たちが死んだらどうになってしまうかという問題を扱った『アブシャロムの死』という説教を私たちは提供しています。しかしこの説教ではその人たちが（ある意味で）生きているときに起こることについて見ていきましょう。

## 生きている者とは？死んだ者とは誰でしょう？ 神殿や祭司とは何を表しているのでしょうか？

レビ人である祭司（コヘニム）が死体に触れたなら、彼らは儀式上汚れたものとなりました。そうすると神の家での奉仕にふさわしくない者となりました。聖書はこのことについてどう語っていて、神はその問題に関してどのような規定を設けているのでしょうか？祭司とは誰で、神殿が表すもの、死んだ者とは誰のことなのでしょうか？

最初に1ペテロ2章5節を見てみましょう。

『あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。』（1ペテロ2章5節）

この箇所には霊の家と書いてあります（ギリシア語では“オイコス *oikos*”）。新約聖書の複数の箇所で教会は神殿であると書かれてあります。私たちは生ける石です。一方で私たちは祭司でもあると書かれてあります。旧約聖書のレビ人たちは他の人とは別に召されていました。レビ人は旧約聖書における信者の象徴です。マラキが『レビの子らをきよめ』（マラキ3章3節）と書いたとき、彼はメシアがすることについて預言しており、後にヘンデル（17世紀ドイツに生まれた作曲家）がオラトリオ「メサイア」の中でその箇所を引用しました。「レビの子らをきよめる」私たちは祭司です。旧約聖書での祭司たちは信者の象徴でした——きよめられる者たちです。詩篇51篇10節に“タホール・エ・レブ・タホール・ブレア・エロヒーム（神よ。私にきよい心を造り）”、“ヴェヘ・ルアハ・ナホン・タダデシユ・ベ・メネ（ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください）”とあるように祭司とは救われたクリスチャンであり、神殿は教会です。教会とは建物を含む場合もあるかもしれませんが、確かに言えることはそれが生きているものであるということです。教会や交わり、集会は神殿です。

そうすると残るのは、死んでいる者とは誰かということです。

ヨハネ 5 章 24 節を開いてみましょう。

『まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。』(ヨハネ 5 章 24 節)

「まことに、まことに」という言葉が出てくるとき、それはセム語系の最上級の表現です。それが分かると話された元の言語がギリシア語でないことが分かります。元の言語はヘブライ語か、おそらくはアラム語であったのでしょうか。ヘブライ語で物事を強調するときには形容詞を繰り返します。私たちは普段家でヘブライ語を話すのですが、私が家に帰ったとき、妻が「外は寒かった？」と聞くと、その返事として私は「とても寒い」ではなく「寒い、寒い」という意味の「カル、カル (*kar kar*)」と言うでしょう。そのことを強調するために二回繰り返すのです。聖書で「まことに、まことに(新共同訳では“はっきり言っておく”)」という箇所を見つけたらそれは強調されている箇所であって、最上級の文法が使われています。イエスの本当に言いたいことがそこにあるのです。それはイエスを信じるならあなたは永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、**死からいのちに移っている**ということです。

神の摂理、永遠の神の観点からは本当の死とは第二の死です。同様に本当の誕生は第二の誕生です。第二の死を逃れる唯一の方法は、第二の誕生を経験することです。永遠に存続することだけが最終的に意味を持っています。生物学的な誕生や死はある意味で表面的なものだと言えるでしょう。**本当の誕生は第二の誕生であり、本当の死は第二の死**です。生まれ変わっていない人、救われていない人たちはゾンビです。生きていても死んでいる者なのです。実際、今日存在していてもその人が生まれ変わっていないなら、神の目からは死んだ状態なのです。悔い改めとイエスへの信仰の告白によって、人は死からいのちへと移ります。

マタイ 8 章 22 節を開いてください。

『ところが、イエスは彼に言われた。「わたしについて来なさい。死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい。』(8 章 22 節)

「死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい」私はこの箇所を元に、「クリスチャンは葬式に行ってはならない」という間違った考えを思いついたクリスチャンの団体を知っています。これは彼らの解釈ですが、この箇所の意味はそういうことではありません。本

文に対するユダヤ文化の背景が分かったなら、それは“イエルシャ (*yerusha*)”と言って——“相続財産”のこと、特に年長の息子が相続する遺産の二倍の受け分のことに関して話されていたということがはっきりと分かります。一方でその二倍の受け分は、両親が生涯を全うするまで世話をする義務と同じものでした。そこでイエスさまが言おうとしていたことは「金銭的な心配のためにわたしに従うことをためらってはならない」ということでした。これがイエスさまの言っていたことであり、問題はお金だったのです。葬式ではありません。

「死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい」救われていない人たちは死んでいます。エペソ 2 章 1 節では『あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって』とあり、私たちもかつては死んだ者でした。死体とは救われていない人の象徴です。旧約聖書、特にトーラーでの死体は、レビ人たちがクリスチャンの象徴であると同じように、救われていない人の象徴です。そしてもちろん、神殿は教会を表しているものです。あなたが死体に触れるとき、汚れた状態になり、儀式的に汚れを受け、神の家での奉仕にふさわしくない者となります。救われていない人たちは私たちを汚します。彼らは何らかの形で私たちを汚れた状態へと変えてしまい、神の家での奉仕にふさわしくない状態へとするのです。

**死体に触れているとある問題が出てきます。その問題とは、あなたがそれに慣れてきてしまうということです**

私は十代後半の大学時代を思い出します。その頃私は肉眼解剖学の研究室に足を踏み入れました。以前そこに入ったことがなく、死体自体は見たことがあったのですが、解剖されている死体は見たことがありませんでした。そこに入ると右側に解剖用の死体があり、左側の棚には妊娠中に亡くなったさまざまな人間の胎芽の標本が並べてありました。そのようなものはホルマリン漬けにされた缶に入っていて、教授は他で見ることができないからと言って学生に公開していました。その中には妊娠中や出産前に死んだシャム双生児の死体がありました。シャム双生児とは頭部の神経系が結合して生まれてくる子どものことです。またシャム双生児の中でも胸部が結合しているものがありました。また一つ目の奇形児の死体まであり、額の真ん中にひとつの目がありました。これらはすべて妊娠中に死んでしまったもので、人の胎芽です。私は以前そのようなものを見たことがありませんでした。これはスピルバーグ監督の映画ではありません（当時はスピルバーグの映画はまだありませんでした）。これは現実です。私はそれを見て、自分はどんな所に入ってきたんだと思いました。

しかし、ご存知でしょうか。葬儀業界や医療の専門家、救急サービスに関わっている人たち、また警察や消防局の人たちと話してみてください。その人たちはいつも死体に触れ、死んだ人を見、事故車や燃える家などから死体を引きずり出したり、そのようなことをし

ています。死体の近くで働いている人に聞いてみてください。最初のショックはすぐ消えてしまうと彼らは教えてくれるでしょう。

私が最初に殺された胎児を見たとき、それを信じるできませんでした。最初に人工蘇生法を施したときのことを思い出します。しかし、しばらくするとパン屋がパン生地を練っているような気分になってきます。慣れてきてしまうのです。これは霊的にも同じことです。救われていない人と一緒に暮らしていたり、働いていたりと、あなたは自分の触れているものが何かを忘れてしまいます。私たちは死んだ者を扱うのに慣れてしまいます。レジにいるあの人や、スーパーにいるあの人は死んだ人です。会社で自分の机の向かいに座っている人も死んだ人です。私の救われていない母や兄弟は死人たちです。しかし私たちはそれに慣れてしまいます。彼らが死人だということを忘れてしまうのです。知ってはいるのですが、心に留めることがなくなり思い悩むことがなくなってしまいます。それでもなお、その人たちは死んでいる者であり、あなたを汚すのです。

古代中近東では、レビ人が民に代わっていけにえをささげていました。その奉仕は後に食べられるような物を扱うことを含んでいました。当然のことながら、当時も伝染病は存在していたため、多くの人と接するその立場から、レビ人は伝染病の媒介者となることがありました。

中近東ではほとんどの期間暑い気候が続きます。体がその生命機能を失うとすぐに青黒くなり、死後硬直が始まります。そして急速に腐敗が進んでいきます。死体は感染性のバクテリアによって腐っていくのです。それに触ってはいけません！素早く埋めてしまわなければなりません！

レビ人がしなければいけなかった奉納や体を洗う儀式は、霊的な意味を持っていましたが、同時に実際的な意味も持ち合わせていました。そのような儀式があったために、ユダヤ人は他の文明と比べて感染症にかかる比率が少なかったのです。カシュルート（食物規定）というものがありました——このことは『カシュルートと飢饉』の説教の中で扱われています——当時は冷凍することができなかったために、豚肉や貝などの食べ物はこのような気候ではとても危険なものとなりましたが、ユダヤ人の間では問題ではありませんでした。彼らはレビ人の律法でそれらを味わうことが禁止されていたために他の文明に比べて、旋毛虫病やボツリヌス中毒になることが非常に少なかったのです。そこでは感染症を持っている媒介が厳しく規制されていました。ツァアラト——これは『らい病人のきよめ』の説教の中で扱われています——はレビ人によって規制されていました。ツァアラトにおかされた人たちは隔離され、宿営の外に離れて住まなければならなかったのです。このようにイスラエルはこの種の感染症に縁がありませんでした。

『そのおきてをことごとく守るなら、わたしはエジプトに下したような病気を何一つあなたの上に下さない。』（出エジプト 15 章 26 節）

この箇所を覚えているでしょうか。この中には霊的な意味がありますが、実際的な意味も同時に存在していました。

血や射精、月経の血、尿、特に傷口や切り傷、裂傷からの漏出などはすべてタブーでした。こういうものは微生物学が到来するはるか以前から起こっていましたが、神は当然バクテリアの存在をご存知でした。このことには霊的な意味がありますが、同時に実際的な意味もありました。なので人々は祭司に頼ることなく、死体を処理しなければなりません。レビ人がある時に死体に触れ、後にいけにえや食べ物、民に触れたりしたなら一体何に感染させてしまったことでしょうか——死体がその人を汚してしまうからです。触れるなら汚れを免れることはできません。それは死んだものだからです。

私たちはこれをどう理解すべきなのでしょう。『友だちが悪ければ、良い習慣がそこなわれます』(1 コリント 15 章 33 節) 私たちの義はイエスの義です。その義は私たちのものとなりました。私たち自身は義を持っていないからです。神の目から見ると“良い人”なんてものはありません。信仰を持っている人でも心が清い人は誰もいません。イエスの義こそが重要なものなのです。友だちが悪ければ、良い習慣がそこなわれます。

## 死んだ者に対して私たちが取るべき態度と対応

私たちはみな主から謙遜について教えられたことがあります。私が教えられたことは次のようなものです。私がまだ結婚して間もなく、新妻とエルサレムにいたときのことで。私たちはベタニヤのラザロの墓と言われる場所に出かけました。そこには実際に岩を掘って作られた墓がありました。その人たちはそれが本当のラザロの墓か確信が無いにもかかわらず、そうだと断言していました。その結果、墓の上に教会を建てることができ、人を呼び込みお金をもうけれると思ったからでしょう。私はそこに小さな灯りを持って入っていき、その灯りの下でヨハネ 11 章にあるラザロの話を読みました。そのとき主は私にあることを示され、その灯りが聖霊であったということを知りました。私にはこの啓示がとても目を開かせてくれるものであり、理解を与えてくれるものだと感じました。しかし数年後、神は 300 年前にジョージ・ホイットフィールドに同じことをすでに示されていたことを知りました。それで自分は“悟りを開いた者”ではなく、他の人と変わらない者だということを知らされました。

イエスはラザロを墓から呼び出すとき 4 つのことを言われました。イエスが最初に言われたのは「彼をどこに置きましたか」ということです。言い換えると、死んだ者はどこにいるのですかということです。次に言われたことは「その石を取りのけなさい」という言葉であり、三つ目に言われたのは「ラザロよ。出て来なさい」というもので、最後は「ほど

いてやって、帰らせなさい」という言葉です。

「彼をどこに置きましたか、死んだ者はどこにいるのですか」これは伝道の完璧な描写ではないでしょうか。私は偶然にイスラエルで聖書を教え始めました。そこには誰も教える人がいなかったからです。私が好んでしたいと思っていたことはいつも伝道と福音を証することでした。私は自分自身のことを聖書を教える教師だと考えたことは一度もありません。ある人たちは私が教える賜物を持っていると言いますが、個人的にそれをいつも否定してきました。今は聖書を教えることに専念しているのですが、私の最初にしたかったこと、また今でもしたいことは伝道です。もし、主がそれをさせてくれるなら、私は完全に伝道に力を傾けるために聖書を教えることをあきらめるでしょう。しかしながらイエスは弟子を作りなさいと言われたのであって、回心者を作りなさいとは言われませんでした。私たちが人を導いていく教会はどのようなものなのでしょうか。動物園のようなものに導いていくべきでしょうか。教会には今聖書の教えが欠如しています。それゆえ私は回心者を作ることの利点が理解できません。イエスは一度も回心者を作れと言われませんでした。弟子を作りなさいと言われたのです。伝道と弟子訓練を切り離すことはできません。このことのために主は当初私が望んでいなかった、聖書を教えることに専念するように導かれました。

「石を取りのけなさい」伝道をしている中で私が学んだひとつのことはこれです。福音を何度となく証して、家々を回り、小冊子を配ったとしても——私はニューヨークで数千冊の小冊子を配りました。メッセージを何度もし、自分が救われた証を話し、福音を数え切れなくらい伝えても、私の声ではなくてイエスの声が聞こえるまでは人が救われることはありません。私たちが福音を証し、伝道し、宣べ伝え、自分の証を話し、信仰について分かち合うとき、私たちは石を取りのけているのです。そうすることによって死んだ者がイエス・キリストの声を聞こえるようになります。

その後イエスは「ラザロよ。出て来なさい」と言われました。昔のペンテコステ派の説教者たちは、イエスさまがラザロと名前を挙げなかったら墓の中にいるすべての者がよみがえっただろうと話をするのを好んでいました。そうかもしれません。それはともかく、ただ人の子だけが死んだ者をいのちへと呼び出すことができます。イエスがそう言われることだけが変化をもたらすのです。

そこでイエスは生きている人たちに向かって言いました。「ほどいてやりなさい」イエスは一度も回心者を作れとは言われませんでした。人々が墓から出て、救われたときその体は布で巻かれたままになっています。その人たちは情緒的、霊的、精神的に縛られています。弟子訓練やカウンセリング、そのような多くのものが必要なのです。中近東にある臭い死体が最初に必要とすることとは何でしょうか？水で体を洗うこと——バプテスマです。

「ほどいてやりなさい」これは弟子訓練です。これこそが死んだ者に対しての私たちの取

るべき行動です。私たちは石を取りのけ、イエスがいのちへと呼び出し、私たちがそれをほどくようにと召されています。しかし、彼らは死んだ者です。ユダヤ人の言い伝えによると、義なる者（ツァディク）が死んでから、その死体の上に“シェキナー（神の臨在）”が三日間とどまると言われています。四日目にはその人は完全に望みを絶たれます。ヨハネ 11 章で『主よ。もう臭くなっておりましょう。四日になりますから』（ヨハネ 11 章 39 節）とマルタが言いました。彼女が四日と言ったのには理由があったのです。四日とはもうすべてが終わってしまい、彼は本当に死んでしまったということを示していました。彼らはもはやその死んだ人物が聖かったからという理由には頼りませんでした。もう腐ってしまったからです。

## “死んだ者に触れてはいけない”とはどのような意味でしょうか？

これは私たちが未信者といっさい関わりを持ってはいけないという意味なのでしょう。違います。そのような意味ではありません。1 コリント 5 章 9 節を見てみましょう。

『私は前にあなたがたに送った手紙で、不品行な者たちと交際しないようにと書きました。それは、世の中の不品行な者、貪欲な者、略奪する者、偶像を礼拝する者と全然交際しないようにという意味ではありません…』（1 コリント 5 章 9 節-10 節）

私たちはコリントの文化的な背景を理解しなければなりません。ここでは実際の不品行、偶像礼拝、占い、神殿娼婦、両性愛などのことが語られています。コリントにはローマから剣闘士たちが来ていました——暴力が娯楽と化していたのです。

パウロは続けて、貪欲な者や詐欺師、偶像礼拝者と完全に交際を絶つようにとは言いませんでした。そうするにはこの世から出ていかなければならないからです。パウロが言っていたのは「いわゆる兄弟と呼ばれる者でそのような者がいたら交際しないように」ということでした。

それは私たちが未信者と何の関わりも持ってはいけないという意味ではありません。私たちは“この世にありながら、この世のものとはならない”ように召されています。パウロは 10 節で『もしそうだとしたら、この世界から出て行かなければならないでしょう』と言いました。

私たちは世から出ていくべきではありません。「この世にありながら、この世のものとはならない」ようにするのです。

ある教会は聖めを一種の穏健な律法主義と取り違えています。それはノミアン主義と呼ばれるものです。ノミアン主義の考え方とは「クリスチャンは映画を見に行ってはならない

、クリスチャンはあれやこれをしてはいけない」というもので、実際それは聖書的なキリスト教というよりはカトリック主義に関連しています。私たちは世から出ていくように召されてはおらず、世の中にいながら世のものになるべきではないのです。私たちは世の中で証人として生きていくべきです。「彼をどこに置きましたか」私たちは救われていない人たちのいる場所に行く必要があります。

これはどのような意味なのでしょう。考えてみましょう。それは死体の防腐処置と関連していることでもあります。死体に防腐処置を施すという習慣はエジプトから渡ってきたもので、それはミイラ化とも呼ばれるものです。

聖書を読むとユダヤ人が族長たちの体に防腐処置を施したとあります。防腐処置の目的は、死んだ者を生きているように見せるということです。その象徴的な意味は信者と未信者が親密な関係を持つことです。これを理解するために 2 コリント 6 章を見てみましょう。

14 節から

『不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかわりがあるでしょう。神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。』(2 コリント 6 章 14 節-16 節)

つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。くびきをつけるというここでのギリシア語は“ヘテロズゲオー (*heterozugeo*)” というものです。それは牛のようにくびきをつけるという意味です。くびきは大きな重い檜の木の子で出来ていて、それに牛は頭を通されていました。牛は古代中近東において最も力のある家畜であって、いつも二頭ずつで売られていました。宴会に招かれた人たちのたとえを覚えているでしょうか。客のひとり『五くびきの牛を買ったので、それをためしに行くところです』(ルカ 14 章 19 節) と言って断りました。この言い訳をしたのは、牛の相性が合うかを確認しなければならなかったからです。二頭の牛はその力や性別、年齢、品種のようなものが合っていなければなりません。ただ二頭の牛がいればよいというわけではなかったのです。若い牛はとも元気があるのですが、すぐ体力を消耗してしまいます。エネルギーを短時間で使い切ってしまうのです。老いた牛のほうが実のところは良いと言えるでしょう。なぜならそれは自分の歩調を保って歩き、長く働き続けることができるからです。二頭の牛の相性が悪ければときには円を描いて回ってしまうこともあったでしょう。一頭が前に行き、もう一頭が後ろでもたもたしているようならそれは問題です。二頭の間には一致が必要なのです。老いた牛が若い牛と組になると大きな問題が起こります。また違った品種でもうまくいきません。

「ためしに行かなくてはなりません」その人は結婚式の宴会に行くのを断るためにそう言

いました。それがうまくいくか確かめなくてはなりません。これは他の箇所でも教会の監督は『まず審査を受けさせなさい』（1テモテ 3 章 10 節）と書かれてあることの意味でもあります。その人が他の長老たちと働くことができるか確かめなさいということです。教会のうちで 3 人か 4 人の長老のうち、ひとりがいつもぼんやりしていることほど悪いことはありません。

不信者とくびきをかけてはなりません。だからといって「私の彼氏は救われたからもう結婚できる」と言うことは十分ではありません。夫が妻のかしらであるのは、キリストが教会のかしらであるのと同じことです。生まれたばかりの赤ん坊に従うことができるでしょうか。その人にはもう少し時間が必要です。夫は神の覆いであり、神の守り、神の愛である保護の象徴、あなたの人生における神の権威とならなくてはなりません。その人がまだ救われたばかりで、あなたが彼よりも多くのことを知っているような状態なら、どうしてそのような人になることができるでしょうか。彼がふさわしい人か吟味すべきです。22 歳で結婚したいのですか？それとも 25 歳や 26 歳で結婚したいのですか？「彼はクリスチャンです」というだけでは十分ではありません。その人はしっかりと吟味されるべきです。

もうひとつ明らかなくびきをつけるという行為があります。それはクリスチャンが法律的や財政的に不信者のビジネスパートナーとくびきを負うということです。ある人はこちらの道を行こうとし、またある人は違う道に進もうとします。神を信じていないビジネスパートナーが居酒屋に行って、飲み過ぎたときにあなたはどのようにするでしょうか。「私は祈ってみたんだけど、こうすべきだと思います」と言うでしょうか。二人とも向かう方向は違うのにくびきに頭を入れてしまっています。そこから頭を出すことはできません。このような状況で人は法律的、財政的に不信者とくびきをつけてしまうこととなります。

結婚は明らかな例でしょう。後に詳しく見ますが、聖書は結婚した後に救われる人に対してのきまりを与えていますが、不信者と結婚することに関してはただ「それをしてはならない」とだけ定めています。くびきをつけると、あなたはそこから頭が抜けなくなります。不信者と結婚するとあなたは汚されるのです。信じていない者は違う方向に行きたがり、違う場所に向かおうとします。あなたは進んでいきたいと望むかもしれませんが、不信者は後ろにひっぱるのです。彼らは何かに引き込もうとするでしょう。そしてあなたは「ちょっと待って」と言いたくなります。死体はいつでも人を汚します。

教会との関係を考えることによって、このことをもう少し掘り下げてみましょう。エズラ書 4 章を開いてください。

『ユダとベニヤミンの敵たちは、捕囚から帰って来た人々が、イスラエルの神、主のために神殿を建てていると聞いて、ゼルバベルと一族のかしらたちのところに近づいて来て、言った。「私たちも、あなたがたといっしょに建てたい。私たちは、

あなたがたと同様、あなたがたの神を求めているのです。アッシリヤの王エサル・ハドンが、私たちをここに連れて来た時以来、私たちはあなたがたの神に、いけにえをささげてきました。』(エズラ 4 章 1 節-2 節)

ユダとベニヤミンの敵たちは異教を信仰しながら、真実の神も同時に礼拝していたこと注目してください。「私たちも、あなたがたといっしょに建てたい」

私は最新版の『アルファ・タイムズ』のコピーを持っています。そこには「ローマ・カトリック教会の聖職者がアルファと引き続き会談する」という記事が載っていました。カテラメッサ神父がニッキー・ガンベル（アルファ・コースの支持者）と対話している写真がそこにはありました。カテラメッサ神父はバチカンの教皇直属の聖職者であり、アルファの事務所から招待を受け 7 回のビデオシリーズで話をするようです。カテラメッサ神父はキリストにある兄弟であり、神を礼拝し、イエスを信じています。しかし、偶像の前にひざまづき、死者に祈っているのです。

「私たちも、あなたがたといっしょに建てたい」神の宮が偶像と何の関わりがあるでしょうか。生きている者が死んだ者と何の関係があるでしょうか。私たちは恋愛や感情的に未信者と関わることについて考えてきました。また財政的や法律的に未信者と関わることについても見てきました。今度は教会が世の偽りの宗教制度と関わることについて考えています。死んだ者はあなたを汚します。他にすることは何もありません。

考えてみましょう。神はある場合に関してだけ決まりを設けました。それには未信者とビジネスパートナーになることは含まれていません。

未信者の彼氏がいるのですか？彼女は献身的なクリスチャンではないのですか？それはあなたの付き合う人ではありません。その人は恋人でも、フィアンセでもなく、死体です。あなたはクリスチャンであるか、“死体愛者”なのかどちらなのですか？

ロマンチックな状況でなされたどんな体の接触でも、感情的なつながりを生み出すことを知っているでしょうか？キスをすることや抱きしめること、相手を撫でることなどは、結婚関係を強固にするために神が設計されたものなのです。その死んだ者にキスさせてはいけません。死体を撫でてはいけません。それを抱きしめるなんてもってのほかです。結婚したいのなら主にあつて結婚してください。そうすればすべてが良いものとなります。しかし、王子様を墓場で見つけたり、シンデレラを死体置き場で見つけるということはできないのです。

私が 13 才くらいのころ、家族にひとつの悲劇が起こりました。私には 19 才でもうすぐ 20 才になろうとしていたところがいました。彼女はことのほか魅力的でした。雑誌の表紙に載るくらい美形だったのです。まるでモデルのようで、それもただのモデルではなく、トップモデルのようでした。今ならスーパーモデルと呼ばれていたことでしょう。彼女はとても裕福な人と婚約しました。彼女の家族も実際に生活が潤っていたのですが、その上お

金がある人と結婚しようとしていたのです。（私は彼女がお金のために結婚し、男の人が彼女の容姿のために結婚しようとしていたとは言いませんが、未信者ならそのようなことを考えに入れていたのではないかと思います）クリスマス・イブの日にそのいとはデラウェアで起こった交通事故で悲惨にも亡くなってしまいました。私は葬式に参列するためにそこに行きましたが、母と彼女の家族はとてもショックを受けていました。親族がカナダやスコットランドから来ていて、その事故は本当に残酷なものでした。

いとは棺おけの中で綺麗な服を着せられ、美容師が美しく化粧し、今までと同じように綺麗でした。彼女はまるで眠れる美女のようでした。ただ私のいとはエイリーンは眠っているわけではありませんでした。彼女は死んだのです。死んだ者は生き返りません。死者はキリストにうちにあるか、本当に死んでしまっているかのどちらかなのです。

あなたは墓場に行って夫を見つけたり、死体置き場に行って妻を見つけようとはしないでしょ。同じように、結婚相手を居酒屋やディスコ、ナイトクラブで見つけることもしないはずですよ。私たちは“世の中にいても、世のものではありません”。

主が導かれるとき、私は正しい人と正しい状況で、きちんとした目的のもとでディスコやナイトクラブに行くことに何の問題も感じません。1980年代の初めパンク・ムーブメントが起きている中、結婚したばかりの妻とロンドンにやって来たことを思い出します。私たちはパンクに関わっている若者たちに小冊子を配っていました。彼らは私の若い頃のヒッピーたちのようで、人生の進むべき方向を探していました。彼らは若い頃から雇用が全く無いことによって権利を奪われていて、そのころはイギリス中に「労働は仕事ではない」とか「不満の冬」といった看板が立てられていました。そのような背景があり、思い出されると思いますが、若者たちはおかしくなっていました。私は妻と若者に福音を伝えるためにガーデン・パレスに行ったことを覚えています。

死んだ者はあなたを汚します。あなたがクリスチャンのビジネスマンであって、神さまに経営を導いてほしいと思ってもうまくはいきません。またあなたの教会が聖書を信じる教会で福音派であっても、リベラルなプロテスタントやカトリック教会と同盟を結んでしまうと、うまくいくことはありません。生きている者はその意味で、死んだ者と共に暮らしていくことはできません。

結婚はどのようなのでしょうか。結婚関係の中では四種類の愛が働きます。それはフィリオ (*philio*)、エロス (*eros*)、ストルガ (*storga*)、アガペ (*agape*) です。ストルガとは家族愛であり、未信者の人もこの愛を持つことが可能です。フィリオとは兄弟愛です。私たち夫婦はどちらもテニスやモーツァルトが好きで、好みが合います。人間的に同じ興味を持っているということです。エロスとは性的な愛です。「私は自分を愛しているからあなたがほしい」というように、未信者はこれらの愛を持つことが可能です。しかし4種類の愛はアガペです。新約聖書においてひとつの箇所だけで、未信者はアガペの愛を持つことができると書いています。それは人が道徳的にひどく墮落してしまい、無条件に悪を愛するようになってしまう場合です。唯一救われたクリスチャンのみが神の愛をもって、

本当のアガペを実行することができます。人間的な愛であるフィリオは役に立たなくなります。性的な愛も確実に衰えてしまいます。誰もずっと若く、顔立ちが良いままでいれるわけではありません。私でさえそうではないのです。家族愛でさえも役に立たなくなってしまいます。ただアガペだけは衰えることはありません。神の愛以外のものを結婚の基礎に据えてはいけません。それだけではなく、アガペを持たない限り、私たちは正しいフィリオ、正しいエロスやストルガを持つことはできません。でなければあなたのストルガやエロス、フィリオは安物で、価値の低いものとなってしまいます。

私はクリスチャンとしては育てられませんでした。実際、私は救われたクリスチャンがどのようなものか子どもの頃には知りませんでした。私が知っていた人たちといえば、カトリック教徒やユダヤ教徒、また名前ばかりのプロテスタントでした。他には知りませんでした。私は他の未信者たちと同様、十代は誰とでも寝るような生活を送っていましたし、未信者がするようなことのすべてをしていたのです。彼女と同棲していたこともあり、色々なことをしてきました。イエスさまはそのような状態から私を救ってくれたのです。私は次のことを言うことができます。あなたが良い恋愛について語ろうとしても、神は最良のものを知っています。神が性を設計しました。神の計画からはずれて良いセックスを持つことはできません。どうして自分と違った永遠の行き先や、目的を持つ人と床を共にし、親密な関係になり、そのような繊細なところを共有することができるでしょうか。さらにある程度までしか未信者の人たちとは性的に交わることはできないのです。

またここで繰り返しますが、私は未信者と結婚したクリスチャンで誰一人として幸せだという人を知りません。ひとりもいません。一方そのような結婚をして不幸せだという人は数え切れないほど知っています。誰も幸せではありません。

## どのような時に死んだ者に触れられるのでしょうか？

一方で神は定めを設けています。近親者のためなら自分を汚すことができます。レビ記 21章 2節に戻ってみましょう。

『ただし、近親の者、母や父、息子や娘、また兄弟の場合は例外である』(レビ記 21章 2節)

このような場合、自分の責任や選択でもなく、私たちはくびきをつけて（ヘテロズゲオー）います。自分の選択や責任によってではなくとも、触れなければならない死体があります。私たちが密接に関わらなくてはならない死んだ者たちがいます。それは未信者である両親や兄弟、また未信者である子どもや配偶者です。私たちが触れなければならない死体があります。神はそれをご存知で、神のことばはそのために規定を設けています。それが

どのようなものであるのか考えてみましょう。

まずこれは自分が選んだことではありません。また神が犠牲者を助けるために介入されることでもあります。もし、あなたがそのくびきをつけることを選ぶなら、狂っているとしか言いようがありません。しかし、自分の頭がくびきにすでに入っているなら、それは神が介入される時です。「近親の者の場合は身を汚してもよい」私たちほとんどの者にとって、小さな子どもは例外ですが、福音を証し、信仰を分かち合うのが最も難しいのは未信者の親類です。彼らはあなたが救われる前のことを知っています。最も難しいといえるでしょう。

他の人たちは今あなたがどうであるかを考えるのですが、救われる前のことを知っている親類は、あなたがどうであったかをいつも考えます。彼らは私たちを知っており、いらさらさせることができます。私たちがクリスチャンになる前を知っている未信者の親類はどこを突けば良いか分かっています。そして悪魔もそれを知っています。彼らは悪魔の矢筒の中にある矢なのです。

私たちを汚し、いらさらさせる性質を持つ人について箴言ではこう言われています。

『長雨の日にしたたり続ける雨漏りは、争い好きな女に似ている』(箴言 27 章 15 節)

フロリダには私の母がいます。善良な主である神は無限の知恵と摂理をもって、彼女のような人を考えながらこの言葉を箴言に入れたことでしょう。雨漏りはしたたり続けます。未信者の親類は誰よりもうまく悪口を言えます。彼らは私たちを肉の性質に陥らせ、雨漏りがしたたるようにさせます。母はよく皮肉を言い、「ほらここにあなたが言う新しく生まれた人がいるじゃないか。テレビであなたのベニー・ヒンを見たわよ。あの人がしていたことを見てごらんない。彼があなたの言う生まれ変わった人なのかい」というようなことを言います。当然、そのようなことを言われると私の中の古い性質が頭を出します。最初のほうは大丈夫です。私はそのような場所から離れるようにしています。なぜならそこにいと、母の挑発に乗ってしまうからです。

「じゃあ母さん、12人の他人の子どもをかかえているアイルランド人の名前が何か知っているかい？」

「知らないよ」

「神父さまさ、へへへ」(母がカトリック教徒であるため)

私がそのように言うのはもっともなことで、真実かもしれませんが。しかし福音を伝えるときの会話としては何の良いところもありません。そうしてしまうことは私の証としてとても悪いことです。普通は自分が家族に福音を伝えるより、主が他の証人を送ってくださるよう祈るほうが良いのです。

小さな子どもの場合を除いて、私たちは親類に言えるすべてのことを言いつくす状態にまで達することができます。今度は生き方において語りかけることが重要なのです。彼らが

あなたの生き方を見るように祈りましょう。しかし他の人に福音を伝えてもらいましょう。彼らは私たちに対して使える攻撃材料を持ちすぎているからです。そしてそのことは悪魔も知っています。

このような死体はあなたを汚します。彼らは私たちの足を引っ張ります。母は私をいらいらさせます。未信者の両親は大きな問題です。そして彼らは死んだ者たちなのです。

民数記 5 章 1 節－3 節を開いてください。

『ついで主はモーセに告げて仰せられた。「イスラエル人に命じて、ツアラアトの者、漏出を病む者、死体によって身を汚している者をすべて宿営から追い出せ。男でも女でも追い出し、彼らを宿営の外に追い出して、わたしがその中に住む宿営を汚さないようにしなければならない。』』（民数記 5 章 1 節－3 節）

宿営から追い出すのです。

『らい病人のきよめ』のテープの中では、ツアラトに象徴された罪のことを説明しています。もしこれらのテープが聞きたいなら、世界でも一流の専門家が 6 時間半の間、罪について語っているのを聞くことができます。

追い出すのです。漏出があるすべての人が感染症の媒介者です。死体によって汚れた者もそうです。教会から出ていくとすぐタバコに火を付け、未信者の彼氏と車に乗り込むようなこと、このような病気は広がります。ひとりの若者がそのようなことをし始めたなら、他の人たちもそれにならって同じことをし始めます。このようなときに指導者が線を引くべきなのです。「すまないが、あなたは宿営の外に行ってください」このような病気は広がります。

一方で、私たちが関係を持つべき死んだ者とはどのような人たちなのでしょう？1 コリント 7 章 13 節－16 節を見てみましょう。

『また、信者でない夫を持つ女は、夫がいっしょにいることを承知している場合は、離婚してはいけません。なぜなら、信者でない夫は妻によって聖められており、また、信者でない妻も信者の夫によって聖められているからです。そうでなかったら、あなたがたの子どもは汚れているわけです。ところが、現に聖いのです。しかし、もし信者でないほうの者が離れて行くのであれば、離れて行かせなさい。そのような場合には、信者である夫あるいは妻は、縛られることはありません。【次の平和という言葉に注目してください】神は、平和を得させようとしてあなたがたを召されたのです。なぜなら、妻よ。あなたが夫を救えるかどうか、どうしてわかりますか。また、夫よ。あなたが妻を救えるかどうか、どうしてわかりますか。』（1 コリント 7 章 13 節－16 節）

信者でない夫や妻を持つとあなたの平和は奪われることがあります。しかしシャロームは奪われることはありません。この箇所の平和という言葉は“シャローム (*shalom*)”です。シャロームはギリシア的な平穏や穏やかさ、争いが無いという意味ではありません。この平和はヘブライ的な「満たされていること」や「完全さ」などの意味があるシャロームです。イエスが『わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います』(ヨハネ 14 章 27 節)と言われた平安です。シャロームは争いが無いということの意味していません。イエスが再臨されるときに争いは無くなります。シャロームはイエスの与える平和です。これはイエスの成就されたことであり、イエスが完成されたことです。私たちはこのテーマについて他の説教で説明しています。そこで“シャローム”という言葉が“レシャレム”という不定詞から来たものであり、“レシャレム”は「満たすこと」と「成就すること」を意味すると説明しています。私たちはシャロームを持っています。なぜならメシアが“レシャレム”を与えるためにやって来たからです。私たちは平和を持っています。それはメシアが**律法を成就**し、私たちの**罪の代価を支払い**、私たちを**御霊で満た**してくださったからです。

「わたしが与える平安」たとえ大きな争いの中で耐え忍んでいる状態でも、私たちはその中でシャロームを持つことができます。反対に、自分の周りに何の争いが無いときでも、シャロームを持っていない時があります。最終的にイエスが与えられる平和は、ギリシア的な平和の意味を含んでいます。国々は「その槍をかまに打ち直し」ます。また千年王国ではまさにその平和が訪れます。しかしながら、今の時点での私たちの平和は目に見えるような争いが無いことを含むものとは限りません。人生には目に見える争いがあつたり、無かつたりするでしょうが、どんな状況であってもシャロームを持つことができます。しかし、私たちがくびきでつながれている未信者の人たち、信じていない親族（特に未信者の配偶者、結婚関係によって結びついている相手）は私たちの平和を奪います。その人たちは私たちの平和を奪うのです。あなたを汚します。あなたの体は聖霊の宮なのです。したがってあなたがその人と床を共にするとき、神の神殿は汚されているのです。しかし神はひとつの備えを与えられました。信者とつながれている未信者はある程度まで、信者の信仰によってきよめられているのです。

家族に信者を持つ未信者は、私たちに汚しはしますが、忌みきらうものにはしません。汚しはしますが、神聖をおかすことはありません。神はある備えを与えられました。そうであれば神の宮の神聖はおかされ、あなたの子どもは未信者のこどもと同じになるのです。神には子どもがいるだけで、神の孫は存在しません。この場合、その聖化の過程は次のように働きます。未信者の子どもは自分で決定が下せるようになるまで、あなたの信仰によってきよめられています。その後子どもは信者になるか、くびきを砕いて去っていくことでしょう。これは未信者の

夫や妻の場合も同じことです。その人たちはある時点まできよめられています。それは救われるかくびきを砕いて去っていくまでです。それゆえ、このことによってあなたの平和を奪われてはいけません。

未信者はあなたを汚しますが、神聖を犯すことはありません。もちろんこれはあなたが神の教えに従って歩んでいる場合で、その人とすでに結婚している場合です。（しかしながら、自分でそのくびきに頭を入れようとするなら、神の教えが確実に必要になることでしょう）

未信者と結婚した人と話してみてください。子どもに起こるような聖化が配偶者にも働いているのが分かります。ある時点において、未信者は救われるか去っていくかを選びます。あなたの平和を大切にしてください。未信者はあなたを汚します。しかし、神の宮の神聖を犯すかといえば、そうではありません。

民数記 9 章 6 節を開いてください。

『しかし、人の死体によって身を汚し、その日に過越のいけにえをささげることができなかつた人々がいた。彼らはその日、モーセとアロンの前に近づいた。その人々は彼に言った。「私たちは、人の死体によって身を汚しておりますが、なぜ定められた時に、イスラエル人の中で、主へのささげ物をささげることが禁じられているのでしょうか。」するとモーセは彼らに言った。「待っていなさい。私は主があなたがたについてどのように命じられるかを聞こう。」主はモーセに告げて仰せられた。「イスラエル人に告げて言え。あなたがたの、またはあなたがたの子孫のうちでだれかが、もし死体によって身を汚しているか、遠い旅路にあるなら、その人は主に過越のいけにえをささげなければならない。』（民数記 9 章 6 節－10 節）

私たちは律法（トーラー）を確立します（ローマ 3 章 31 節）。律法の中にあることはキリストにあって成就しています。私たちの過越とは何でしょうか？それは私たちの主ご自身です。私たちは主の聖餐にあずかることによって過越を祝います。1 コリント 5 章や 1 コリント 11 章から主の聖餐が私たちの過越だということが分かります。私たちは『最後の晩餐』という説教を提供しています。そこでこのことを分かりやすく説明しています。しかし 1 コリント 5 章と 11 章を読むとそれは明らかになるでしょう。

主のペサハ、主の食卓、主の過越に参加したいと思っても、死んだ者を触ってしまったならあなたは自分が汚れたと感じます。悪魔はいつも弱いところを突いてきます。教会に行く前に未信者の夫が議論を吹っかけてきたり、未信者の妻があなたをいらいらさせたり、救われていない十代の息子が何かをしてそれに反応していると、自分が汚れたように感じます。その結果として、礼拝でパンが渡され、コップが回されているときでもそれを取る気にはならないことがあります。それはそのような状態で聖餐にあずかって良いのか分か

らないからです。死んだ者と接触したためにあなたは自分が汚れていると感じます。これがよく私たちに起こることではないでしょうか？私は確実にこの経験があります。しかしそこでも神は言われます、「あなたはペサハにあずかりなさい」。1 コリント 11 章を読むと主の聖餐は私たちの弱さの中で行われることが分かります。あなたの平和を奪わせてはいけません。あなたが主の食卓に来るとき、そこにはあなたのための場所が用意されています。もう一度言います。あなたの平和を奪わせてはなりません。感情的にあなたを落ち込ませるような状況に、霊的にも引き込まれてはいけません。死体はあなたを汚します。それは事実です。神はそれをご存知で、あなたもそれを知っていますし、誰でも分かっています。しかしそれでも神の食卓にあずかることができます。神はそのために備えを用意されています。神は私たちの弱さの中で働かれます。そして主の聖餐において、あなたがあずかることのできる意義は大きなものなのです。

## 私たちが触れなければならない死体への神の備え

私たちが受け入れるべき死体に関して神は備えをされています。結論として民数記 19 章 11 節を開いてください。

『どのような人の死体にでも触れる者は、七日間、汚れる』（民数記 19 章 11 節）

ここで“七日間”と書かれてあることに注目してください。神は地を六日間で創造され、七日目に休まりました。神は一週間を七日間に決めました。

『その者は三日目と七日目に、汚れをきよめる水で罪の身をきよめ [ヘブライ的なタホル (*tahor*) という考え方です]、きよくならなければならない。三日目と七日目に罪の身をきよめないなら、きよくなることはできない。すべて死んだ人の遺体に触れ、罪の身をきよめない者はだれでも、主の幕屋を汚す。その者はイスラエルから断ち切られる。』（19 章 12 節-13 節）

私たちは死体に触れるなら汚れることを知っています。たとえそれが近い親類であっても、未信者ならあなたを汚します。あなたの妻や夫が信者でないなら、その人と寝るときにあなたは汚れます。それゆえ、きよめられなくてはならないのです。「罪の身をきよめない者はだれでも、主の幕屋を汚す」と書かれてあります。

未信者と結婚したとき、どのようにして神の幕屋をきよく保つのでしょ

うか？

『その者は、汚れをきよめる水が振りかけられていないので、汚れており、その汚れがなお、その者にあるからである。人が天幕の中で死んだ場合のおしえは次のとおりである。その天幕に入る者と、その天幕の中にいる者はみな、七日間、汚れる。』(19章 13節-14節)

ここでも七日間と書かれています。

『ふたをしていない口のあいた器もみな、汚れる』(19章 15節)

そこにある器からも飲んではいけません。

『また、野外で、剣で刺し殺された者や死人や、人の骨や、墓に触れる者はみな、七日間、汚れる。』(19章 16節)

このことのためにユダヤ人は墓を白塗りにしました。ユダヤ人は墓場を前もって準備しておき、過越などの巡礼祭の時期にまだ空の墓の中で寝たりしていました。しかしいったん死体がそこに入れられると、死体が入っていることが分かるように墓を白く塗りました。それは入ってはならないというサインであり、祭りの時期に儀式的に汚れを受けないためです。これがイエスがパリサイ人に言っていたことです。「白く塗った墓」(マタイ 23章 27節) 中身が死体で満たされている墓です。

『この汚れた者のためには、罪のきよめのために焼いた灰を取り、器に入れて、それに湧き水を加える。身のきよい人がヒソブを取ってこの水に浸し、それを、天幕と、すべての器と、そこにいた者と、また骨や、刺し殺された者や、死人や、墓に触れた者との上に振りかける。身のきよい人が、それを汚れた者に三日目と七日目に振りかければ、その者は七日目に、罪をきよめられる。その者は、衣服を洗い、水を浴びる。その者は夕方にはきよくなる。』(19章 17節-19節)

夕方と書かれてあるのには意味があります。主がお許しになるなら、私たちは来年の春の集会で『大患難を理解する』というテーマでこれについて語りましょう。

『汚れた者が、罪の身をきよめなければ、その者は集会の中から断ち切られる。その者は主の聖所を汚したからである。汚れをきよめる水がその者に振りかけられなかったため、その者は汚れている。』(19章 20節)

ここではその人の体だけではなく、聖所を汚したと書かれています。

『これは彼らに対する永遠のおきてとなる。汚れをきよめる水を振りかけた者は、その衣服を洗わなければならない。汚れをきよめる水に触れた者は夕方まで汚れる。汚れた者が触れるものは、何でも汚れる。その者に触れた者も夕方まで汚れる。』(19章 21節-22節)

死体に触れると汚れを受けます。その衣服も汚れます。神はこのことに関して規定を定められます。それは汚れをきよめる水で洗うことです。他の参考箇所の中でもエペソ 5章にはどのように書かれているのでしょうか？イエスは花嫁を婚礼に備えるためにどのように花嫁を洗われるのでしょうか？イエスはみことばの洗いをもってきよめられます。神のことが私たちにきよめます。みことばは死体から受けた汚れを除去します。しかし、汚れをきよめる水で自分の身をきよめなければ「その者は集会の中から断ち切られる」のです。

クリスチャンとして育てられた若者が主から離れ去って、悔い改めないで多くの場合未信者と結婚してしまうことがよく起こるのに気付かないのでしょうか？エサウが異教徒と結婚したときにどのように両親の心を痛めたかを思い出してください。

**では救われたときにすでに異教徒と結婚していたらどうなのでしょう？**

ここでヒソプが登場します。ヒソプは血を塗るために使われたものであることを覚えているのでしょうか。民は過越のときにヒソプとこてに入れた子羊の血を取り、ヒソプを血に浸し、かもいと門柱に十字の形を塗りました。

ダビデ王が悔い改めを記した詩篇 51 篇には『ヒソプをもって私の罪を除いてきよめてください』(7 節) と書いてあります。しかし聖書はきよい者がヒソプを使わなければならないと言っています。言い換えると汚れていない者がヒソプを使わなければならないのです。私たちはお互いに交わりを必要としています。私たちは頻繁に死んだ者に触れます。このことのためにどんな規模の教会であっても、フルタイムで奉仕するクリスチャンが必要とされるのです。教会が大きくなってくると、教会の中にいる人たちはそれほどこの世と接する必要がなくなり、それほど汚れを受けなくなります。そうすると人はより互いに仕え合えるような状態になります。

ここで私はただそれが職業となっているフルタイムの奉仕者を支持しているのではありません。私が教会を巡回する以前、奉仕のためにお金をもらうことは一度もありませんでした。

た。私は仕事が必要であれば、薬局で処方箋を書いていました。私は天幕作りのような仕事を軽んじてはいません。また移動することがなければ私は今も“天幕作り”をしていたことでしょう。とはいえ教会が成長してくると、フルタイムの牧師が必要だということを私は知っています。これがひとつの理由です。

死体と関わりを持って教会に入ってくる人はそこから回復することと、元気づけられることが必要です。その人たちは汚れたものとなっているので、きよい人たちと接する必要があるのです。「きよい水で体を洗い」また衣服を洗いましょう。

このきよめを行う日が三日目と七日目であることに注目してください。メソジストが日曜日に教会の礼拝を持ち、週の中ごろに家庭で聖書の学びをしていたのには理由があります。水曜日に聖書の学びを持ち、日曜日に礼拝を持つのにはある考えがありました。三日目と七日目です。このように神は週を設定されました。

例を示しましょう。なわについての昔話があります。なわが真ん中でたるんでいたならそれを持ち上げれば良いというものです。三日目と七日目がそうです。私たちは四六時中死んだ者たちと一緒にいます。私なら七日目のシャワーまで待ちません。死体置き場の中に入ったとしたら、ずっと体をしっかりこすってきれいにするでしょう。私なら一週間たたないうちにクリーニング屋に服を持っていきます。死体に触れたかもしれないのです。もう服はひどい臭いがします。ラザロは四日間死んでいました——ひどい臭いです。三日目と七日目にヒソプできよめ、体を水で洗い、その後衣服を洗うのです。祭司の衣服は亜麻で作られていたと言われていました。

黙示録 19 章 8 節を開いてください。

『花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された。その麻布とは、聖徒たちの正しい行ない[ミツヴォート (*mitzvot*) ]である。』(黙示録 19 章 8 節)

イザヤは救いの衣、墮落した人の裸を覆う服のことを語っています。イエスは婚礼の礼服について語られました。祭司の衣服は亜麻でできていました。聖徒の正しい行い、善い行い、クリスチャンとしての奉仕、私たちの行為や奉仕は汚れたものとなります。私たちが死んだ者と働くなら、私たちの善い行いやクリスチャンとしての奉仕などは奪われます。これらのものは汚れます。どのようにしたら再びきよくすることができるのでしょうか？きよくするのは教会ではありません——クリーニング屋です！そこできよくされます。衣服はどうするのでしょうか？きよい人がヒソプをもって水で洗いきよめます。このようにすることによって、不運にも死体と接触した私たちの体を生きたものとしめます。このようにして私たちはタホル (*tahor*) となります。こうしてきよめられ、きよいものとなります。

神は私たちが死んだ者と接しなければならぬことを知っており、それに触れなければならぬことを知っています。神は死体が私たちをどのように汚すかを理解されており、その

けがれをきよめる規定を定めておられます。しかし、私たちがその規定に従わなければどうなってしまうことでしょう。

私たちのほとんどが何らかの形でくびきにつながっています。それはたとえばクリスチャンになる前に結んだ雇用であったりするかもしれません。またクリスチャンになる前に、今もクリスチャンになろうとしないような人と結婚したかもしれません。それらすべてのこと——未信者の両親を持っているかもしれませんが——神はご存知です。それらのことを理解しておられます。

レビ 21 章には「近親の者のためには主の祭司は身を汚してもよい」と書かれてあります。近親の者であってもあなたを汚しはします。しかし神はそのために規定を設けておられます。神は「わたしの食卓に来なさい。あなたは過越にあずかり、主の聖餐にあずかることができる。他の信者と同じように主の食卓にはあなたのための場所が用意されている」と言われています。神はきよめの規定も定めておられます。それは救われていない親類、子ども、妻、夫などが救われるか去っていくまで、一時的にきよめを与えられています。神はそのために備えを置かれています。神は少なくとも週に二回はきよめを定められています。あなたが死んだ者といつも働き続けている場合、生きている者と交わりを持つ必要があります。私たちは汚れを受けるので“きよめる水で洗う”必要があります。私たちの亜麻の服は洗う必要があります。それは私たちの善い行い、聖徒の正しい行いが再びきよいものとなるためです。またヒソプが必要です。三日目と七日目に交わりを持つことを必要としています。神はご存知です。死体に触れることがどのようなことか神はご存知です。神はそれを受け入れられています。しかし私たちがご自身の規定に従うことを要求されています。

あなたがくびきに頭を入れているのなら、また死体に触れているのなら、神はそのために備えをされています。しかしそのくびき以外に、主の祭司を汚す近い親類以外に関しては神は何の規定も与えておられません。ひとつとしてないのです。

聖霊はパウロを用いて、このことを可能な限り直接的に書いています。

『不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかわりがあるでしょう。』(2 コリント 6 章 14 節-15 節)

不信者と信者とにどんなつながりがあるのでしょうか？生きている者と死んだ者と何の関わりがあるのでしょうか？ありません。全くないのです！

神の祝福がありますように。